

# 遊びにおける幼児の“走る”行為の発達の検討とその意味 ー相互行為としての“走る”行為と意味世界の生成ー

香曾我部琢\*・高木恵美子\*\*・小岩井 伸\*\*\*・中澤 祐人\*\*\*・小林みゆき\*\*\*  
杉谷 佳昭\*\*\*・樋口 知也\*\*\*・松澤 将樹\*\*\*・渡邊 悠介\*\*\*

(平成24年9月28日受付；平成24年11月2日受理)

## 要 旨

本研究では、遊びにおける幼児の“走る”行為の社会的な意味に着目し、“走る”行為が生み出される要因とその年齢による差異を明らかにすることで、幼児の“走る”行為の社会的な発達プロセスについて検討を行う。その結果、遊びにおける幼児の“走る”行為の要因として、『運動的』、『イメージ的』、『手段的』、『反応的』の4つの要因が存在すること、5歳児では『運動的』と『イメージ的』が多く、4歳児では『反応的』が多く、3歳児では『手段的』が多いことが明らかになった。それらの結果から、5歳児では役割取得、4歳児では相互作用の対象の変化など社会性の発達と強く関連することが示唆された。しかし、3歳児で『手段的』が多い理由が不明であったため、さらに3歳児の『手段的』の事例の分析を行った。その結果、3歳児が(1)他者との相互作用への情動的な志向性、(2)モノへの先占的な志向性、これらの2つの志向性から“走る”行為を生み出していることを明らかにした。そして、2つの志向性による幼児が“走る”行為によって、その行き先で新たな社会的空間を立ちあげたり、他の社会的空間に参加したりすることを示し、遊びにおける幼児の“走る”行為が社会的空間の越境を表象していることを示唆した。

## KEY WORDS

走る running, 相互行為 Interaction, 他者 Others, モノ Objects, 意味世界 The Meaning-world

## 1. 問題

### 1. 1 幼児の身体活動の重要性

現代社会における子どもの体力・運動能力の低下は日本だけでなく、多くの先進国で見られる共通の社会的な問題である (Sallis et al. 2000) <sup>(1)</sup>。日本では、1966年から10年ごとに運動能力の全国調査が行われ、走力・跳躍力・投力・持久力・調整力などの5つの体力因子をもとにした5種目の測定が行われている。その結果、子どもの運動能力は1973年から停滞し始め、1986年から低下がはじまり、1997年から低下した状態のままの状況となり (森2011) <sup>(2)</sup>、その低下の要因として、運動機会の減少や生活の利便化、生活習慣の乱れなどが指摘されている (中央教育審議会 2002) <sup>(3)</sup>。

また、伊藤 (2008) <sup>(4)</sup>が「体力・運動能力の低下は、単に運動面や怪我をしやすくなるといった問題だけではなく、肥満や生活習慣病などの健康面、更には意欲や気力といった精神面などにも悪影響を及ぼす。」と述べているように、幼児の運動能力低下が招く問題は単純に筋機能の低下という現象だけではない。幼児の行動を調節する神経機能、有能感や自尊感情など心の発達、生活習慣病の予防医学的な観点など、幼児の発達にさまざまな悪影響を与えることが示されてきた (山本2005, 田中2008, 田中2010) <sup>(5)</sup>。

### 1. 2 幼児の社会的行為としての“走る”行為

さらに、遊びにおける幼児の身体活動については、森 (1999) <sup>(6)</sup>が、幼児たちが遊びにおいて身体の動きの共有することで、「対人関係的な自己の自己知覚が成立した」事例を示し、他者と関係性を構築する際に身体活動が重要な役割を果たすことを示した。さらに、榎沢 (1996) <sup>(7)</sup>は、遊びにおいて幼児の身体がその幼児の心情を表象することによって、その場の雰囲気を作り出したり、他の幼児の身体と同化することで他者と結びついたりすることで遊びを支えることを示した。つまり、遊びにおける幼児の身体活動は、その幼児の運動能力や健康状態を表す物理的・機能的な現象として捉えるだけでなく、幼児の心情や思考を表象する社会的・文化的な現象と捉える必要があるのである (香曾我部2011) <sup>(8)</sup>。

\*学校教育学系 \*\*上越教育大学附属幼稚園 \*\*\*上越教育大学 (修士課程)

### 1. 3 幼児の運動能力としての“走る”行為

これまで幼児の“走る”行為については近藤（1999）<sup>(9)</sup>や杉原ら（2004）<sup>(10)</sup>、文部科学省（2006）<sup>(11)</sup>の幼児や児童を対象とした体力・運動能力に関する調査において、その調査項目として25m走が取り入れられていることから理解できるように、幼児の走力は運動能力を測定するための重要な指標の一つとされてきた（一谷1967）<sup>(12)</sup>。そのため幼児の“走る”行為については物理的な側面だけが研究対象とされ、その社会的・文化的な現象としての意味は捨象されてきた。

人が“走る”ことの社会的・文化的な意味については、渡邊（2008）<sup>(13)</sup>が、自らのジョギングの体験をもとに、成人期においてもジョギングする目的が経年変化し、多様化することを明らかにし、発達に応じて人の“走る”行為の社会的・文化的な意味が変容することを示唆した。このことから、遊びにおける幼児の“走る”行為が持つ社会的・文化的な意味も多様で、幼児の発達に応じて変容すると考えられる。そこで本研究では、遊びにおいてよく観察される“走る”行為に着目し、幼児の“走る”行為の社会的・文化的な発達プロセスを明らかにし、幼児の心情や思考をどのように表象しているのか、遊びにおける“走る”行為の社会的・文化的な意味について検討を行う。

## 2. 研究Ⅰ：方法

### 2. 1 研究対象と期日、時間

A市内B幼稚園に在籍する3歳児（15名）、4歳児（20名）、5歳児（25名）の計60名を対象とした。観察日時としては、2011年6月21日、22日、23日の連続した3日間、自由遊びの時間の9:00～10:30の90分間にビデオカメラによる記録を行った。その際、1単位時間15分で、各年齢児の保育室、テラス、遊戯室、園庭を順にタイムサンプリングを用いて記録した。映像の撮影、取り扱いについては、日本保育学会が刊行した保育学研究倫理ガイドブックにもとづき、データの保管は第一著者が管理するなど倫理的配慮を行った。

### 2. 2 サンプリングと分析の手続き

記録したデータは、荒川（2005）<sup>(14)</sup>によって開発されたmivurixというツールを使用し、“走る”行為について行動を切片化した。mivurixによる事例抽出の結果、517件の幼児が走る事例を抽出した。それぞれの事例について、年齢、性別、走り出した場所、向かっていった場所、人数、その事例における発話や言動の概要、“走る”行為の要因についての概要、以上7項目に分けて分類を行った。

Table 1 “走る”行為の要因カテゴリー

分類	小分類
i：運動的	追いかっこなど走るという運動自体が楽しい様子、走ることが目的になっている
	①複数の友達と互いに追いかけたり、追いかけられたりして遊んでいるときの走り【追いかっこ】
	②特定の友達を追いかけているときの走り【友達を追いかける】
	③特定の友達から追いかけられているときの走り【友達から逃げる】
ii：イメージ的	ごっこ遊びの役割などのイメージを持ったときの走り
	④ヒーローなどのごっこ遊びのなかで、遊びのイメージを持ちながらの走り【遊びイメージ】
	⑤友達とごっこ遊びのイメージを共有しながらの走り【イメージ共有】
	⑥泥棒と警察、鬼などの役割など、一定のルールのもとでの追いかっこ【鬼ごっこ】
iii：手段的	遊びにおいて必要となったモノや場所などを得るため手段としての走り
	⑦自分が欲しいモノを手に入れたり、好きな友達に向かったりするときの走り【目的移動】
	⑧自分の興味のある遊びをするために、それができる場所を探すための走り【場所探索】
	⑨一度、目的としていたモノや場所に着いた後に、また違う場所に行くときの走り【第二移動】
iv：反応的	遊んでいる過程で友達や先生などの他者から促されてからの走り
	⑩先生からの声掛けやゼスチャーによって促された走り【教師誘導】
	⑪友達からの声掛けやゼスチャーによって促された走り【友達誘導】

“走る”行為の要因とは、遊びにおいて幼児が走り出した理由である。本研究では、幼児の走り出す前と、走っていった後までの様子を映像データからその様子の概要を記述することで、幼児の“走る”行為の要因について検討を行った。検討では、まずそれぞれの事例ごとに、その要因について簡単な概略（コード）を作成した（オープン・コーディング）。その概略をもとにより抽象度の高い概念へとまとめて11の小カテゴリー（Table 1, ①～⑪）に分類し、さらにその11の小カテゴリーをもとに4つの要因カテゴリーを帰納的に構成した（焦点化コーディング）。その結果、『i：運動的』、『ii：イメージ的』、『iii：手段的』、『iv：反応的』の4要因に分類した（Table 1）。なお、このコーディングは保育者1名（第2著者）を共に行った。

作成した要因カテゴリーについては、第1筆者が全ての小カテゴリーから5件の事例を用意して、保育者経験年数15年以上の保育者に確認を行った。評定者の一致率は0.91が得られた。なお、要因カテゴリーでの不一致はなく、不一致の事例は小カテゴリー間のみであり、それらは評定者間で協議し調整した。

### 3. 研究ⅰ：結果

合計517件の事例を抽出し、まず要因カテゴリーごとに合計をまとめた（Table 2）。その結果、『手段的』が多いことが明らかになった。そこで、要因カテゴリー(4)×年齢(3)について（Table 3） $\chi^2$ 検定を行った。要因カテゴリーの年齢比較に関しては有意な偏りが見られた（ $\chi^2(6)=52.633$ ,  $p<.01$ ）。よって残差分析を行った結果、『運動的』では3歳児が少なく、5歳児が多いこと、『イメージ的』では4歳児が少なく、5歳児が多いこと、『手段的』では、3歳児が多く、5歳児が少ないこと、『反応的』では、4歳児が多く、5歳児が少ないことが明らかになった（Table 4）。

Table 2 合計

	合計
i：運動的	49
ii：イメージ的	92
iii：手段的	348
iv：反応的	27

Table 3 年齢

3歳児	4歳児	5歳児
5	9	35
26	5	61
107	84	157
6	16	5

Table 4 Table 3の残差

3歳児	4歳児	5歳児
-2.90**	-0.66	3.15**
0.08	-4.25**	3.45**
2.07*	1.61	-3.19**
-0.68	4.78**	-3.36**

※ \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

### 4. 研究ⅰ：考察

結果から、5歳児では『運動的』と『イメージ的』が、4歳児では『反応的』、3歳児では『手段的』が多いという特徴がみられた。5歳児で『運動的』な走りが多い点については、これまでの運動能力に関する調査の結果から明らかのように、走能力の向上が強く関連していると考えられる。さらに、5歳児の『イメージ的』な“走る”行為については、田中（2005）<sup>(15)</sup>が鬼ごっこにおける仲間意識について、4歳児ではオニ役割とコ役割の役割交代が困難であるが、5歳児になると役割交代が可能になること、神谷（2011）<sup>(16)</sup>が役割取得について5歳ごろになると自己と他者の視点が分化され、遊びにおける役割取得能力の質的な変容を指摘している。以上の指摘から、5歳児になるとごっこ遊びにおける役割取得能力の発達によってごっこ遊びの質的な変容が促され、それに伴って5歳児では『イメージ的』な“走る”行為が多くなると考えられる。

次に、4歳児では『反応的』な走りが多いことが示されたが、徳岡（2012）<sup>(17)</sup>らはひとりで遊ぶ3歳児と4歳児の他者との相互作用を観察し、4歳児になると幼児同士の相互作用を多くなることを示した。本研究でも、『反応的』な走りにおいて、3歳児から5歳児にかけて幼児同士と保育者との相互作用の比率が、次第に幼児同士が高くなっていることが明らかになった（Table 5）。つまり、4歳児で『反応的』な走りが多いという結果は、4歳児の他者との相互作用の発達のな変容と関係が深いと考えられるのである。

Table 5 『iv：反応的』な走りの小分類度数表

	3 歳児	4 歳児	5 歳児
教師誘導	4	8	0
友達誘導	2	9	4

Table 6 『iii：手段的』な走りの小分類度数表

	3 歳児	4 歳児	5 歳児
場所探索	16	9	18
目的移動	89	70	137
第二移動	2	0	1

最後に、3 歳児では『手段的』な走りが多いことが示されたが、Table 6 に示したように、そのほとんどがモノを取ったり、友達を探したりする「⑦目的移動」によって“走る”行為が生じていることが明らかにされた。しかし、研究 i ではこの場所やモノ、人などの目的がどのような文脈の中で生じたのか、その詳細については明らかにしてこなかった。そこで、この『iii：手段的』の走りが生じる前後の文脈をさらに詳細に事例として書き起こして、その3 歳児が『手段的』に“走る”行為の意味について検討を行おうと考えた。

## 5. 研究 ii：方法

### 5. 1 研究 ii の目的

研究 i では、3 歳児に『手段的』な走りが多いことが明らかになったものの、その前後の様子を詳細に明示する必要性が示された。そこで、研究 ii では3 歳児が『手段的』な“走る”行為において、どのような目的を達成するために“走る”行為を生み出しているのか、その前後の様子をさらに詳細に事例化することで、“走る”行為について、社会的・文化的な文脈や背景を含めて明らかにしようと考えた。そこで、研究 ii では再度3 歳児の『手段的』な“走る”行為の事例の映像データについて、その前後の文脈を含めて事例の抽出を行う。

### 5. 2 事例抽出の手続き

まず、3 歳児の『手段的』な“走る”行為の107事例の映像データについて、その“走る”行為が生起する要因が生じる前から、その行為が終わった後、その後の遊びの展開が一区切りするまでを事例として詳細に記述した。つぎに、事例ごとに『手段的』な“走る”行為の社会的・文化的な文脈と背景についてコーディングを行った。

コーディングの手続きは、①事例ごとに『手段的』な“走る”行為によって遊びにどのような変容が起きたのか、その前後の遊びの変容に着目して『手段的』な“走る”行為の社会的な意味についての概略（コード）を作成し、②それらの概略で似た内容の事例を小さなまとまりにし、③いくつかの小さなまとまりをさらに一つの大きなまとまりとして、より抽象度を高い概念へと再構成していった。コーディングの結果については、研究 i と同様に保育歴15年以上の保育者のスーパーバイズを受け、この分類の適切さについて検討を行った。

## 6. 研究 ii：結果と考察

3 歳児の『iii：手段的』な要因によって生み出された“走る”行為の107事例を対象に、より詳細な事例として抽出し、それらの分析を行った。その結果、遊びの変容から『手段的』な“走る”行為には(1)他者との相互作用への情動的な志向性、(2)モノへの先占的な志向性、以上2つの志向性があり、(3)この2つの志向性が混在する事例が存在することが明らかとなった。107事例の内、(1)が29事例、(2)が63事例、(3)15事例であった。事例の分類についてはその概要をTable 7 に例示する。

### 6. 1 他者との相互作用への情動的な志向性の事例と考察

事例 a. ヒーローごっこをしているD男に向かって“走る”A男（6月21日）

保育室で新聞紙を丸めた棒を作って、剣に見立ててごっこ遊びをしているA男、B男、C男。保育室から廊下へ歩いて行く。はじめ、スポンジ積み木と逆方向の玄関に行こうとするが、戻ってきてスポンジ積み木で作った基地を乗り越えて、廊下の空いているスペースに行こうとする。廊下の空いているところで、戦隊のヒーローになりきってパンチやキックなどを行っているD男がいる。D男がくると1回転してからキックして、廊下にすべりこんでいく。スポンジ積み木の上に乗ってその様子を見ていたA男がD男の方に走って側に寄って話かける。そして、剣を使ったり、パンチをしたりして互いにヒーローの話をする。

## 事例b. リボンを作ったB子が砂場のC子に向かって“走る”行為（6月23日）

B子がしゃがんでフライパンに砂をつかんで入れている。まわりを見渡して、落ちていた小枝を拾いに行く。そこに保育室でリボンを使って遊んでいたC子がリボンを左手に持ち、帽子を押さえながら砂場で遊んでいるB子に向かって走っていく。B子の隣で肩が接触するまで近づいてから離れる。B子はしゃがみこんで小枝を折ってフライパンに入れている様子をC子は立ってリボンを左手で軽くゆらしながら見ている。そこに保育者がやってきてD子を指しながら、C子に話しかける。D子が自分が使っていたボウルを出して見せる。B子は、立って見ているC子に目を向け、またすぐ手元に視線を戻す。その後、C子はB子の側を離れ、砂場で遊んでいるD子のところへ行く。その後も数回、砂場内で遊んでいるD子の横へと場所を移動するが、時折B子の様子を見ている。

## 【考察】

この2つの事例では、A男はヒーローごっこをしているD男に、C子は砂場で遊んでいるB子に向かって走った後に、その相手に対して相互作用を試みていることから“走る”行為の行き先である友達に興味があったと考えられる。とくに、2組の幼児達は身体を用いてイメージを伝えあったり、身体が接触したりするまで近づいていることから、相手に対して相互作用したい欲求を強く抱いていると捉えることができる。つまり、A男とC子は一緒に遊びたいという気持ちを、相手の幼児の接触するほど傍にまで“走る”ことで相手の幼児に伝えようとしたと考えられるのである。

松井・無藤・門山（2001）<sup>(18)</sup>は、砂遊びにおける仲間入りへの方略について、3歳前半では模倣などによる働きかけが多いが、3歳後半から4歳前半までは相手の活動へ暗黙的な方略を用いて参加するようになり、4歳児後半になると言葉による明示的な方略が増加することを示した。さらに、塚崎・無藤（2004）<sup>(19)</sup>によると、3歳児は年長児に比べて「いれて」などと言葉で明示的な仲間入りをするよりも、押ししたり、抱きついたりするような身体接触などの暗黙的な方略で仲間関係を成立させていることを明らかにした。以上の先行研究の成果から、遊びにおいて3歳児が「走る」行為を相手の活動へ仲間入りする際の暗黙的な方略として用いていると考えることができる。

## 6. 2 モノへの先占的な志向性の事例と考察

## 事例c. G子の虫を採るための“走る”行為（6月21日）

## 事例2 3才女児 保育室

テラスに繋がる扉から、虫が保育室に入ってきた。製作コーナーで先生や友達と一緒に製作していたが、G子が飛んでいる虫に気づき、しばらく保育室全体をその虫を探すように視線を漂わせている。虫を見つけるとそれに向かって大きくジャンプするように走り出して、虫を追いかけてつかまえようとし始めた。ただし、少し虫に対して恐怖心を持っており、突然虫が近づいてくると逃げないように身をかがめるが、またジャンプして走って追いかけていった。虫が天井の方に移動するとG子は上をしばらく見つめて、また製作コーナーに戻って再び製作し始めた。

## 事例d. E男がセロハンテープを取るために生み出した“走る”行為（6月22日）

## 事例1 3才男児 保育室

E男が、F子の隣に座って、F子が新聞紙を使って棒を作ってくれるのをいまいまいかと楽しみに待っている。F子が新聞紙を巻き始め、あと少しでまき終わるときに、E男が急に立ち上がって、セロハンテープが置かれた棚に向かって走り出す。そして、セロハンテープを切り取ると、F子の側までゆっくり歩いて来て、F子が丸めてくれた新聞紙に張り付けようとする。F子も近づいてくるE男がセロハンテープを付けやすいように、丸めた新聞紙の端をE男の方に持ち上げて見せる。E男はテープを付けるとそれをもって上に剣のように持ち上げて「ねえ、見てー」と近くにいる子ども達に話しかけ始めた。

## 【考察】

この2つの事例では、E男はセロハンテープに、G子は虫に向かって“走る”行為を生み出していることから、モノに対して強い関心を抱いていたと理解できる。とくに、E男はセロハンテープを手に入れると、“走る”行為をせずに歩いて自分の居た場所に戻ってきている。つまり、幼児がモノに対してそれを取得しようとする心情を強めるとき、“走る”行為を生み出していると考えられるのである。

モノを取得しようとする幼児の心の変容や発達について、山本（1991）<sup>(20)</sup>はただ単に自我や自己意識の形成ではなく、「子供の社会システムへの参入・創造」の過程を示すものであると述べた。そして、モノの所有に対する意識が



平等関係と関連し、その変化が幼児の社会的な相互作用のあり方に強い影響を与えることを示した。とくに、幼児期のモノの取得に関する意識について、先にモノを持っていた者がそれを使い続ける権利があるという「先占の尊重」原則が3歳児に見られ、社会性の発達において重要であることを示唆した。

事例3, 4では、幼児たちが自分のものにするためにモノに向かって走っていく様子が理解できる。幼児がモノの取得に関して『先占の尊重』原則を認識していることを念頭に置くと、自分が欲しいモノ、必要としているモノと優先的に相互作用する権利を得る方略として、“走る”行為を生み出していると考えられるのである。

### 6. 3 2つの志向性が混在する事例と考察

先に、3歳児に多く見られる『手段的』な要因による“走る”行為が2つの志向性を持ち、遊びにおいて他者やモノと相互作用を生み出すための方略として用いられていることを示した。しかし、“走る”行為が1つの志向性だけで生み出されるのではなく、他者とモノへの志向性が混在して幼児の“走る”行為として現れる事例が多く見られた。以下、他者とモノへの志向性が混在した事例である。

事例e. 製作コーナーに向かうH子の“走る”行為（6月22日）

セロテープやのり、はさみなどが置かれた製作コーナーで、紙を丸めて作った棒の先にリボンをつけているH子。それができる、そのリボンを持って宙に泳がせるようにしてテラスに走って持っていく。走っていくH子の様子を見ている保育者。しばらく、テラスを走りまわったあとに、またH子が保育室に入ってくる。H子は壁面を見ながら、リボンを空中に泳がすように棒を振り歩いていて、製作コーナーで先生が作っているモノをみて、不意に先生に向かって走り出し、先生の目の前にリボンをぶら下げて「〇〇先生もこういうの・・・」と話しながら、先生が作っているものを見た。一度、先生から離れるが、すぐに走って戻ってきて、リボンを自慢するようにぶら下げる。それに対して、先生は自分が作った紙の飾りを自慢するようにH子に向かってぶら下げた。

#### 【考察】

この事例では、H子がテラス方向から保育室に走ってきて、先生に向かってくるが、H子の“走る”行為の志向性は、先生が作っているモノや先生自身の二つに対して向けられ、その志向性が混在していることが理解できる。しかし、志向性が混在した事例の場合でも幼児の“走る”行為後に、幼児が他者やモノと相互作用する様子が生み出されることは変わらない。つまり、遊びにおける『手段的』な“走る”行為は、その後に他者やモノとの相互作用を生み出す方略として用いられていると考えられるのである。

## 7. 総合考察

本研究では、研究iiの成果として、遊びにおける幼児の『手段的』な“走る”行為がその行き先となる他者やモノと相互作用を生み出すための方略として用いていることを明らかにした。方略として用いていることから、幼児はあてずっぽうに“走る”行為を用いているのではなく、その行き先の他者やモノとの相互作用についてある程度の予測をしつつ、相互作用を成功させるために“走る”行為を選択していると考えられる。つまり、幼児の『手段的』な“走る”行為は、それによって相互作用への欲求の強さを行き先となる他者が感じ取るという関係だけでなく、すでにそれ自体が行き先となる他者が相互作用を受け入れてくれるだろうという期待によって生み出される、二重化された依存関係の中で行われる相互行為であると考えられるのである（西阪1997）<sup>(21)</sup>。

この相互行為について、佐藤（2008）<sup>(22)</sup>は「人間の行為の本質はモノとそして他者とのかかわる相互行為である。そして、この相互行為によって社会的空間がつくられていく」と述べ、相互行為によって社会的空間を構成することを示した。そして、構成された社会的空間において、幼児が他者やモノとの相互行為を行う中で意味世界を生成することを示した。すなわち、遊びにおける幼児が“走る”行為によって、幼児がその行先で様々な他者やモノと関わって生成する意味世界の存在を認識することが可能となるのである。

## 8. さいごに

保育者にとって遊びにおける幼児の“走る”行為は、屋内では安全面への配慮から制限すべき行為であり、屋外では運動的成長のために促すべき行為であった。そのため、これまで屋内では“走る”行為は禁止され、屋外では運動

的な側面しか着目されず、その行為の意味については保育実践の中で問われてこなかった。しかし、本研究では、遊びにおいて幼児が“走る”行為は、ただ単に運動的な欲求によって表出する行為ではなく、その“走る”行為を通して他者と相互作用をしようとする幼児の心情の表れであることを明らかにし、保育者が幼児の“走る”行為から幼児の心情や他者との相互作用の在り方を見取るだけでなく、そこで生成された遊びの意味世界を認識できる可能性を示した。すなわち、幼児の“走る”行為から新たな幼児理解の視点が得られると考えられるのである。保育実践において幼児の言動から、幼児の心情を読み解く行為は保育者にとって重要な専門性の一つである。今後、養成課程や現職教育において、さらなる幼児の身体活動に着目してその社会的・文化的な意味を問い直すことが求められよう。

## 引用文献

- (1) Sallis, JF. & Prochaska, JJ. Taylor, WC. (2000) : A review of correlates of physical activity of children and adolescents. *Med Sci Sports Exerc* 32(5) 963-975).
- (2) 森司朗 (2011) 幼児の運動能力発達の年次推移と発達促進のための実践的介入, 平成20～平成22年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書.
- (3) 中央教育審議会 (2002) 子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申)
- (4) 伊藤秀志 (2008) 遊び相手や内容が幼児の体力に及ぼす影響, 財団法人静岡総合研究機構情報誌「SRI」92, pp.51-62
- (5) 山本裕二 (2005) 心の発達にかかわる身体運動, 子どもと発達発達2(6), pp.370-375  
田中沙織 (2008) 幼児期の身体活動と生活リズムにおける関連性. 発達発達研究40. 杏林書院. pp.1-10  
田中沙織 (2010) 幼児の身体活動に対する保育者の意識に関する研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第59号, pp.161-166
- (6) 森司朗 (1999) 幼児の「からだ」の共振に関して一対人関係的自己の観点から, 保育学研究37(2), pp.152-158
- (7) 榎沢良彦 (1996) 園生活における身体の在り方—主体身体の視座からの子どもと保育者の行動の考察, 保育学研究35(2), pp.258-265
- (8) 香曾我部琢 (2011) 遊びにおける幼児の“振り向き”の意味: 3歳児の砂遊びにおける“振り向き”から相互作用への展開事例の検討より. 保育学研究48(2). pp.43-54
- (9) 近藤充夫・杉原隆 (1999) 幼児の運動能力検査の標準化と年次推移に関する研究, 平成9～平成10年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書.
- (10) 杉原隆・森司朗・吉田伊津美 (2004) 幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析, 平成14～平成15年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書.
- (11) 文部科学省 (2006) 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究.
- (12) 一谷彊 (1967) 運動能力の因子分析的研究, 京都教育大学紀要30, pp.21-34
- (13) 渡邊義行 (2009) ジョギングを行う目的の経年(45歳から65歳まで)変移, 現代教育学研究紀要1, pp.123-133
- (14) 荒川歩 (2005) 映像データの質的分析の可能性: mivurixによる指折り行動の分析から, 質的心理学研究4, pp.66-74.
- (15) 田中浩司 (2005) 幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達. 発達心理学研究16(2). pp.185-192
- (16) 神谷友里, 吉川はる奈 (2011) 幼児の役割遊びにおける役割取得の特徴に関する研究: 5歳児のごっこ遊びの成立過程, 埼玉大学紀要・教育学部60(2), pp.19-28
- (17) 徳岡大, 前田健一 (2012) ひとり遊びをしている幼児と他者の相互作用の変化. 広島大学心理学研究11. pp.99-105
- (18) 松井愛奈, 無藤隆, 門山睦 (2001) 「幼児の仲間との相互作用のきっかけ: 幼稚園における自由遊び場面の検討」 発達心理学研究12(3), pp.195-205
- (19) 塚崎京子・無藤隆 「3歳児の仲間関係における身体接触」 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要1, 65-74, 2004 お茶の水女子大学
- (20) 山本登志哉 (1991) 幼児期に於ける『先占の尊重』原則の形成とその機能: 所有の個体発生をめぐって. 教育心理学研究39(2). pp.122-132
- (21) 西阪仰 (1997) 相互行為という視点. 金子書房, p.19
- (22) 佐藤公治 (2008) 遊び: モノ, 行為, 空間の相互関連性. 佐藤公治編著. 保育の中の発達の姿. 萌文書林. pp.120-167

## Developmental examination on infantile behavior of “running” in play

Taku KOUSOKABE\* · Emiko TAKAGI\*\*

Nobu KOIWAI · Yuto NAKAZAWA · Miyuki KOBAYASHI · Yoshiaki SUGITANI,  
Tomoya HIGUCHI · Masaki MATSUZAWA · Yusuke WATANABE\*\*\*

### ABSTRACT

In this study, we focus on the social meaning of the infantile behavior of “running” in play and clarify the factors generating the behavior of “running” and their differences between ages to examine the social developmental processes of the infantile behavior of “running”. Consequently, as the factors of the infantile behavior of “running” in play, it was revealed that there exist four factors of “kinematic”, “imaginative”, “instrumental”, and “reactive” and that there are many factors of “kinematic” and “imaginative” in five-year-old children, “reactive” in four-year-old children, and “instrumental” in three-year-old children. From those results, it was suggested that the social development such as a role taking in five-year-old children and a change of the interactive target in four-year-old children were strongly related. However, since the reasons for many “instrumental” factors in three-year-old children were unknown, the “instrumental” cases in three-year-old children were analyzed further. Consequently, it was revealed that in three-year-old children, these two intentionalities of (1) an affective intentionality to interaction with others and (2) a prior occupational intentionality to objects generated the behavior of “running”. And the infant with the behavior of “running” due to two intentionalities launched new meaning-world at the destination or showed to participate in other meaning-world, suggesting that the infantile behavior of “running” in play represented the border transgression of meaning-world.

---

\* School Education      \*\* Kindergarten Attached to Joetsu University of Education

\*\*\* Joetsu University of Education (Master's Program)